

保 育 ノ ー ト

「保母の生活」が本号の特集。

「保母の生活はどうか」(笠原秀定氏)では「幼稚園の現状、保母の資格、日常生活、経済生活、私立幼稚園の経済的問題

などにひととおりふれ、福利厚生施設に希望をかけている。これについて「めぐまれぬ経済生活を打開するには」において、秋田美子氏は、「一に、自分の現在の生活を、いかにゆたかなものにさせるかということについて努力してみること、二には保育者の待遇の改善について、さらにおおくの社会の人びとに、理解による協力をしてもらうために、はたらきかけるには、どうすればいいかを考えてみることをすすめていく。また、めぐまれた環境の中で、勇気と

感激をもって毎日を過す仲田安津子氏の「私の生活」、ときどきくるスランプや、父兄にわかってもらえぬかなしきがあっても、苦しいこともまた楽しとする阿部明子氏の「苦しいこと、楽しいこと」などに、保母の生活の一端を知ることができよう。最後に、田中あい氏は「職場と家庭を両立させるには」どのようなことが必要なのか、を経験から考え、名実ともに信頼される先生がひとりでも多く育つよう望んでいる。

その他「10月のカリキュラム解説」は「みんなできたえよう」を主要な生活の場として、自然、ことば、絵画せいさく、音楽リズム、社会、健康、家庭との連絡、などについて解説をしているので参考になろう。

保 育 の 手 帖

「現場の先生はどのような勉強をしているか」という座談会。これは七月末の全国国立公立幼稚園教育研究協議会を通しての五人

の園長の座談会の記録である。集団指導について、教育要領の受けとめ方、表現活動について、一日の教育計画について、以上の四分科会のもよみを述べられ、現場の教師の考え方の傾向を示しておられる。すなわち、非常に具体的、直接的で、原理的なものを追求しようとする意欲の少ない型と、原理がないと不安であるという理論型の二つの層がある。しかし、概念と実際のへだたりをせばめて、何か自分の力を本モノにしようとしている傾向もある。

教育要領の影響については、教育要領を絶対視する前に、自分の幼稚園の環境と教育要領を合せ考えて各園独自のカリキュラムを作成することが必要であると結ばれている。また、人間形成の場としての幼稚園を考えたとき、指導技術と人間形成とがかけはなれてしまわぬよう、つねに、その社会、その子どもというものからみて、望ましい人格の形成をはかることが大切である。

以上、協議会の分科会のそれぞれのよう
すから、幼児教育の根本の点に到るまで話
し合っている。

保 育

先ずひろげると、村山貞雄氏の『母親と
教師のみた保育効果』に目をひく。

母親も、教師も、保育効果というのは興
味深くもありまた知りたいものであろう。

データをもとに研究の一部がかかれて
あるが、母親も教師も効果としてみる点
は同一点が多い。しかし、その効果の考え
方に相異がある。母親は家庭本位に社会を狭
くみつめ、教師は大きく眺めて評価する。
それについて村山氏は、両者が考える教育
目的の差異と言われている。

その他地域差についても書かれ、興味深
い研究である。今月は①であるから続くの
であろう。

文部事務官玉越三朗氏の『統計的にみた

幼稚園のすう勢』では全国的の幼稚園の状
態を伺うことができ、統計など参考になる。

これに類して千葉の宮内氏の『これから
の幼稚園』は、私どもが念願している義務
教育ケースにあてはめてみた幼稚園で、そ
れにはことばでは簡単に言えるがその内容
を考慮し、その方向に努力することの必要
が書かれている。前半の幼稚園形態が本省
のことはなら皆、義務制実現に喜び上るで
あろう。

月刊保育カリキュラム

今月の「望ましき教師の姿」は長田新氏
が書いておられる。毎月、諸氏がこの頁に
筆をとっていられるが、年令の幼い幼児教
育こそ、その指導する先生によって、どん
なにでも形づくられるから考えてみれば恐
しいことである。長田氏は、人間味豊かな
親しみある先生、朗かで先生自身が無邪気
な先生、学問的な教養を十分に身に積んで

いる先生、の三つを強調していられる。す
なわち何といつてもわれわれは、もつとも
っとベスタロッチやフレーベルを研究し、
人間教育の根本原理を肉体化することを切
実に感じさせられる。

先月の栄養につづき、平井信義氏、千羽
喜代子氏の発表は「情緒の発達について」
で、情緒の分化、要因、恐怖についてかか
れている。芽生えた幼児期の情緒はそのま
ま固定し将来まで続く可能性も多いし、子
どもの性格を特徴づける一つの要素ともな
るから、われわれは健全な性格を形成する
ため情緒を正しい成長に導くように、日常
の取扱に考慮を払う必要があると実例をあ
げて述べられている。

保育内容では十月なので何といつても運
動会のことが多く、健康の面から、社会
面から、製作、言語すべて運動会を中心
に具体的に指導があがっている。

なお、「保育技術」として、ある幼稚園と
保育園の日誌があげられ、それについて植

松氏、浅野氏がそれぞれ批評をかいていら
れるから、一読するのも面白い。

保育の友

第六回全国保育大研究会の模様を本号で
扱っている。この研究会は研究発表と分科
会が主なものであるが、研究発表として、
「保育における集団指導についての試み」
(福井県若草保育園 戸倉百合子)をのせ
ている。戸倉氏は、社会性の育成と、問
児の成長を目的とし、ひいてはそれが、保
母の労力軽減となることをも考慮にいれ、
研究方針を集団指導においたとし、集団指
導の方法と経過をのべ、集団指導の結果、
などをあげている。よい研究であるので
つとこの研究が続けられることを期待す
る。

各分科会の模様は各助言者から、千二百
字前後の感想記事で報告されており、これ
によって読者は、分科会で話題となった問

題点をダイジェスト的に知ることができ
る。

研究会の総会において、厚生省児童局長
が保育所の適正運営について強調したとい
う。本号ではそれを「曲り角に立つ保育所」
と題し、田頭晴彌、松村康平、山中綾子、
吉岡利昭の諸氏を招いて座談会を開いてい
る。保育所の適正運営は最近の「保育所の
幼稚園化」に対する警告として現われたも
のである。この座談会で話題となったこと
は、(1)保育所が幼稚園化してきた原因は、
現代では小学校に上る前に幼児教育をして
おかなくてはならないという父兄の都会的
観念と、保母の立場からも保育内容の面で
幼稚園化しようという方針によるものであ
る。(2)具体的には、保育所で集団指導が徹
底してきたために幼稚園化したとうけとら
れるもので、この傾向は内容的にみて望ま
しいものである。(3)保育に欠ける子だけを
保育所に入れるという措置の適正のための
尺度は、まず家庭の貧困と手不足を問題に

するが、むしろフリーな人間関係の側か
ら、保育に欠けるかどうかを尺度とみるの
も一案である。(4)保育に欠けるかどうかに
こだわるより、保育所が少しくらい幼稚園
的であってもよいからどしどし増設すべき
であるという提案。(5)幼稚園の保育所化と
いう傾向もある。これは幼稚園でも保育所
にならって非常に長く子どもを預かるよう
になってきたという面からも見られる。(6)
結局行政管理庁の保育所が幼稚園化してい
るから是正を望む、という勧告は独善的で
あるなどの諸点である。それぞれの意見が
問題の本質をついていて参考になる。

幼児の指導

最近、子どものしつけの問題がやかまし
く取上げられているので、長田新氏の「幼
児のしつけ」の項の一読をおすすめする。
氏はしつけは一般に幼い子どもとときの方
がうまくゆく、そのしつけの中で真先きに

取上げてみたいのは、自分のことは自分でやるという習慣である、と強調されてい
る。日本の親と教師とは老婆心がひどく発
育していて、子どもに出来ることもなにも

かもやってしまうが、これは愛情のはきち
がえではあるまいか。かわいいから子ども
にさせずに、親なり教師なりが、やってし
まうと、その結果子どもは独立心がなくな
って依頼心が強くなり、人生の落伍者にな
ってしまう。教育という仕事は自分で自分
を助けるような人間を作ることだ。こうい
う教育は子どもの時でなければ身につくも
のでないとべられ、二、三の実例をあげ
て、親も教師も子どもに自分のことは自分
でやらせるようにすることが大切で、わが
子がかわいいならわが子の代用品になるこ
とはやめるがいいと言っておられる。
毎月の指導の手引き、健康・製作・自然
・社会・言語・リズム遊びなどの各項も具
体的な問題をとりあげているので参考もな
るであろう。

上沢謙二氏の「丸い卵も四角」の一文も
面白く、その中でいろいろと教えられる点
が多いと思う。

基督教保育

「基督教保育」をここで紹介するのはこの
十月号がはじめてであるが、雑誌を手にして
みると、表紙には第一三二号とあるのでも
わかるように、本誌の歴史もすでに古い。

四六版、五〇頁の手頃な雑誌、基督教保
育連盟の発行。さらに表紙には、一基督教
幼稚園七〇周年記念——としているから、基
督教主義の幼稚園教育をはじめから今年
は、七〇周年という記念の年にも当ってい
るようである。

さて本誌の編集方針をみると、どの保育
月刊誌にもみられるように、全体の半ぐら
いの量は先生の修養や教養になるような卷
頭言や心理学、教育学などの理論的な読み
もの、次の半は、教育計画や教育の実際の

場に役立つもの、残りの半は、社会行事、
地方や都会の通信、研究会報告といったも
のにあてられている。目次の一二を拾って
みると

初心(大和田功) 六才の赤ん坊(阪本一
郎) 週間礼拝のおはなし(高田彰) 保育
計画 音楽の幹に小枝を(四の原悠子) グ
リン・ボード(長野静江) 動物美(寺尾勇)
自然観察について(殖生操) 幼児の社会性
の発達について(南沢しげ) 幼児の言語生
活(島田みつ子) どんぐりひろい(佐山朝
子) おうちに飼ったこおろぎさん(渡辺
栄) 研究発表によせて(佐藤初重) 世界
子供の日にちなんで 沖縄幼児教育のため
に遺産全部(岩村清四郎) など。

通覧してみても本誌の特色と感ぜられるも
のは、何といっても、基督教の信仰がどの
紙面にもにじみ出ていることである。

頻出する社会悪に、政治と教育のあり方
が真剣に考えられている現状である。

欧米の国民の大部分が、日曜ごとに教会

に通つて説教をきき、朝に夕に神に祈りを捧げて生活の反省をしているのに、仏教国であるはずの日本国民が、日々の生活と仏教とがどれほど結びついているだろうか？すべてのものの根基を培うことを任務としている幼稚園教育において、小さいときからの信仰の問題、敬けんな態度や心持の育成はどうあつたらいいのだろうかなど感慨にふけりながら通読したのであつた。

幼児と保育

特集「頭のいい子わるい子」は、テストの結果に一喜一憂する親たち、進学に心を痛める教師の参考になろう。

「幼児の知能はどの程度が普通か」―では「三才、四才、五才くらいの子どもの場合、ただ知能検査だけで知能をみていくというのはむしろ危険で、それよりも先生なり親なりが、その子どもが日常生活の中でどのような行動をとるだろうかということ

を注意深く観察することの方が大事だということになる。」「幼稚園時代には、社会的な生活能力、注意力、忍耐力、観察力などを養うことが大切で、注意力とか観察力とかは、知能そのものではないが、頭を有効に使うためにはゆるがせにできない。……大たい五段階くらいにわけて自分の子どもがどのくらいの程度かは知るべきだと思う。……大事なことは、努力することによって持っているものを全部だすことだ」など知能というものの考え方、指導の方法の指針となる。社会生活能力検査が、具体的にのせてあることは、大へん親切である。

相談室「あたまのよい子あたまのわるい子」も参考になる。

前月号についで「彫刻とあそぶ子どもたち」も木株の城、螺旋形のすべり台など、北欧の美しい造形環境を写真入りで楽しませてくれる。毎号のことながら、「指導技術」も直接役立つ。

幼児の教育 第五十七巻 第一号

一月号◎ 定価 五十円

昭和三十二年十二月二十五日印刷

昭和三十三年 一月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。